

仏の願い

平成24年 西雲寺だより 夏号(27号)

永代経のご案内
7月10日(火)～11日(水)

10日 お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

11日 お日中(10:00～) お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

法話 福井 奥田順誓師

——11日はバスが出ますのでご利用下さい——

放送会館前発(8:50)～東別院前～工大温泉前～西安居經由
坪谷発(9:00)

常森発(9:00)～国見～鮎川～小丹生經由

**万障お繰り合わせの上
お誘い合わせて
お参り下さい**



親鸞聖人のご生涯

晩年の親鸞

義絶後の親鸞

往生極楽のみち

親鸞聖人は八十三歳頃、信心に揺れを生じて、関東から十余ヶ国のさかいをこえて、身命(しんみょう)をかえりみずして訪ねて来た門弟たちに対して、「ひとえに往生極楽のみちをいきかんがためなり」(歎異抄第二条)と断定的なお言葉でご教示下さいました。往生極楽の道とは、後生(ごしょう)の一大事ということでしょう。後生の一大事ということについて、大谷派の曾我量深師のお言葉を記しておきます。

命より尊いものがなければ命の尊さは分からない。命を懸けるといふことがあつて人生というものが成り立っているのである。身命よりも人間の命よりも尊いものがある。往生極楽の道という。命よりももつと尊いものがある。だから人間は、その命よりも尊いたつた一つのを明らかにするために、その命を懸けねばならぬ。その命を捨てねばならぬ。その一大事というものを明らかにするために、それを解決せんがために、命を大事にしておるのである。命はやたらに捨ててはならぬ。命は人生の一大事のために捨てなければならぬ。(曾我量深先生のお言葉)

善鸞義絶

親鸞聖人が関東を去つて二十年近く過ぎると、関東の教団において、門弟や同行の中に自分勝手な思いや計らいでさまざまに異義をとねえる者が出てきて、大混乱を引き起こしたのである。聖人はお手紙やお聖教を送つてなんとか解決しようといふ力を尽くされたが、かなわず、ご長男の善鸞を yourself の名代として派遣して解決しようとしたのです。しかし、力不足というか収めることができず、かえつて異義の方に加担し、また権力者に近づいて念仏者を迫害するようになつたのです。また父親の威を借りて、父親鸞から私が夜中にそつと聞いたことが本当だから、今まで聞いたことは捨てなさいと、父親に背き仏法に背く行動に出たのです。このことを知つた聖人は、深い悲しみと歎きの中に善鸞を義絶されたのです。子が親に背くという肉親の間柄の問題だつたら、どこにでもある話で義絶することもなかつたでしょう。しかし法に背き、共に念仏する人達に背くことは許すことはできなかつたのです。これは五逆の罪を犯し、正法(しょうぼう)を誹謗し、教団の和合を破ることになるのです。聖人は、この善鸞事件を通し、法に背く息子を持つた身の罪深さに悩まされ続けると共に、慚愧(ざんき)の念に耐えなかつたこと思われます。しかし、聖人はこの罪悪深重(ざいあくじんじゅう)の身を、今一度、如来の本願の前に据えて立ち上がつていかれるのです。

親鸞聖人九十年のご生涯の中で、最もい

のちを輝かされ、信心を深めていかれたのは、この善鸞事件の前後の八十一歳から八十五歳の間なのです。思い悩む日その中に、おいて深い思索を重ねられ、後の私たちに大切な著作を残されたのです。それは、曇鸞大師の著わされた『大無量寿経』の註釈書である『浄土論註』のみ教えに改めて学ばれ、またよき師法然上人の言行にたち帰つていくという営みでした。そのようななか、聖人は八十三歳のとき、火災に遇つておられます。大切なお聖教や自分が書き残したものの、また執筆途中のものなど焼失してしまつたかも知れません。八十歳を過ぎて次から次へと辛い事がふりかかつてきたら、大抵の人はへこたれてしまひそうです。が、聖人は決してへこたれることはなかつたのです。それは聖人のいのちはこの世にありながら、本願を生きるいのちであり、どれだけこの世の辛さがあつても、むしろそれを業縁、逆縁として、かえつて信心が深められていつたのです。

夢告讃(むこくさん)

弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
撰取不捨の利益にて
無上覚をばさとするなり

この和讃は、夢告讃といわれるものです。康元二年、聖人八十五歳の二月九日の夜、寅の時、すなわち午前四時、旧暦ではあります。二月の午前四時といえはまだ暗いその時、夢の告げにこのご和讃をいただくのでした。誰からいたただいたとは書かれていませんが、聖徳太子はその化身である

といわれる救世(くせ)菩薩から夢の中でいだかれたものと思われます。

親鸞聖人は、人生の節目で人生に思い悩んだとき、必ず救世菩薩から夢の告げを受けておられるのです。まず十九歳の時、比叡山での修行にゆきづまり、聖徳太子の磯長(しなが)のご廟に参籠された時、「汝の命根(みょうこん) 十余歳なり」という夢告を受けています。また二十九歳のとき、比叡の山を下りるかどうか迷われて京都の六角堂に百ヶ日参籠された時には、同じく救世菩薩の夢の告げをうけ、比叡山を下りる決心をされ、吉水の法然上人の草庵をたずねられたのです。

聖人は、我が息子善鸞を義絶されて以来、ご本願をいただき直しながらも、老いの身には時には腰がくだけ、深い罪悪感にさい悩まされることがあつたのでしよう。そのような時には、聖徳太子を念じ続けておられたのです。そのように思い悩む二月九日の朝方、救世菩薩の夢の告げを受けたのです。「弥陀の本願信ずべし」これは誰かに勧めることばではありません。聖人が聞き取ったことばです。「汝、弥陀の本願にたちかえり、本願をさらに聞きひらいて、本願を生きぬけよ」という救世菩薩の叱咤激励の声を聞いたのです。聖人はこの夢告を受けて、聖人九十年

のご生涯の最期の大仕事、「正像末和讃」の作成にとりかかられたのです。

悲泣にはじまる仏道

釈迦如来かくれましまして
二千余年になりたもう
正像の二時はおわりにき
如来の遺弟(ゆいてい) 悲泣(ひきゅう) せよ



国宝 正像末和讃
(高田専修寺蔵)

これは正像末和讃全百十六首の第一首目のご和讃です。「如来の遺弟悲泣せよ」といわれる如来の遺弟とは、お釈迦さまなき後の仏弟子、私たちのことです。お釈迦さまがなくなつて二千余年たつてしまつた、もうお目にかかることはできない、お釈迦さまの影響も衰えて仏道を歩むことが困難になつた、このような時代に生まれ合わせた罪の深さを歎き悲しめといわれるのです。しかし、そのようなところは

私たちに起りません。それは私たちに仏道を歩みたいところが無いからです。しかし、そのことこそ歎き悲しまなければならぬことなのでしょう。

末法五濁

仏道において、時代を正法(しょうぼう)、像法(ぞうぼう)、末法(まっぽう)、法滅(ほうめつ)のこととに分けます。仏教の歴史観です。一般的には、時代が進むと進歩発展す

ると考えられます。しかし、仏法においては、時代がたつにつれ社会や人間は段々と衰えていくと説くのです。正法の時代とは、お釈迦さまが亡くなつて五百年の間は、仏法が栄えて仏法を求め、仏道を歩む人がいる時代、次の像法の時代とは、正法の時代が終わつて一千年の間はまだお釈迦さまの影響が残つていて仏道を歩む人がいる時代、末法の時代とは、像法の時代が終わつて一万年の間はお釈迦さまの影響も無くなつて、教えだけが残る時代、仏法を求めずとも成就しない時代です。末法の時代が終わると法滅の時代が到来するといわれます。この仏法の歴史観は、キリスト教などが説く終末思想とは違います。終末思想は、この地球が滅亡するというものです。正像末の歴史観は、仏法が衰えて仏法を求め仏道を歩むことができなくなるといふ危機感です。末法は五濁といわれ、五つの濁りを内容としています。

- ① 劫濁：時代の濁りです。世の中が悪くなつてきます。
 - ② 見濁：物の見方が自己中心になり邪見驕慢になることです。
 - ③ 煩惱濁：貪欲、瞋恚、愚癡の三毒の煩惱が盛んになることです。
 - ④ 衆生濁：人間の濁りです。人間としての器がだんだん小さくなつてゆきます。
 - ⑤ 命濁：命の濁りです。何のために生きているのかわからず生きてるよろこびもありません。
- 私たちに於いて、この末法五濁の世到来という悲しみのところに、弥陀の本願が聞こえてくるのです。(住職)

永代経法要によせて

仏法相続 仏法聴聞は先祖の願い

家族の者がお亡くなりになりますと、喪主の方が「永代経」をあげて下さいませ。それには、仏法が繁盛し、子々孫々にまで相続されますようにという願いが込められています。その願いによって勤められ、亡き人をご縁としてこの私が仏法聴聞させていただくのが永代経法要です。

親鸞聖人はご本典『教行信証』を結ぶにあたって、道綽禅師の『安樂集』のお言葉を引用されています。

前(さき)に生まれん者は後(のち)を導き、後に生まれん者は前を訪(とぶ)りえ。連続無窮(むぎゅう)にして、願わくば休止(し)せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなりと

仏法にご縁をいただいた者には大きな使命があります。それは自分の両親、祖父母、または今は亡き先祖の方々、仏法を聴聞しながら苦惱多きこの娑婆をお念仏とともに生きられ、またお浄土へ還られたすがたを訪ね、学ばせていただくことです。そして、後に続く子や孫に、お念仏申すことの尊さを教えていかなければなりません。

人生にはお金や財産、地位や名誉など大切なものがたくさんありますが、家族のなかに仏法があり、それが先祖代々相続されているということが最も尊いことなのです。

しかし今日、家族の崩壊がいわれ、家族の絆が叫ばれているなか、仏法相続するということは非常に困難な時代になりました。私たちは聴聞をとおして、仏法の尊さ、必要性を感じていますが、それを家族の者に伝えるとなるとこれほどむずかしいことはありません。若い者に、仏法を聞け、お内仏に参れといくらいつてもなかなか聞いてくれないと思います。それは、仏法はことばでなしにその人の人柄や生きざまを通して伝わっていくからです。

私も住職としてお説教をさせていただきますが、家族の者には全く響かないと思います。それは私の一部始終をみな知っているからです。いくらよいことをいつても化けの皮がはがれてしまいません。しかし、私には家族の者が仏法を聞いて欲しいという願いがあります。家族の者に信用してもらおうというよりも、一人の凡夫、愚か者にたちかえり聞法させていたたく以外にありません。仏法はその人の生きざま、うしろ姿をとおして伝わっていくものです。自分の思いや計らいで伝わっていくものではありません。

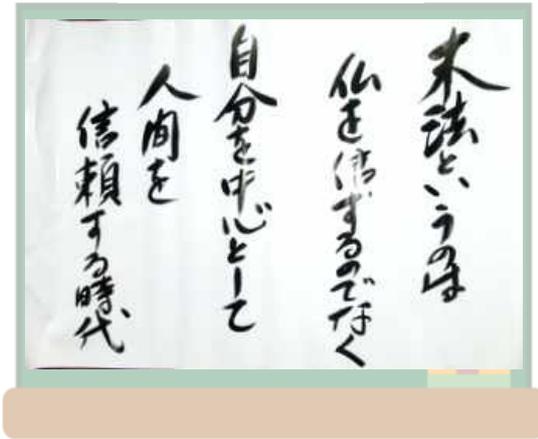
お内仏のお給仕を通して仏法相続を

各家庭にはお仏間があり、ご本尊を奉安するお内仏があります。お内仏は家の中心であり、家族の拠り所ですが、ただの飾りものになっていて、心からのお給仕がなされていないのではないでしようか。枕経にお参りさせていただくのと、全く日頃お給仕されていないお内仏があり、淋しい思いになる場合があります。お内仏にはご本尊、阿弥陀如来が奉安されています。ご本尊とは「最も尊いこと」ということで私のいのちより尊いもの、というよりも私のいのちを本當に尊いものとして、目覚めしめ、生かして下さるおはたらきです。このご本尊の前に座れば、他の場所では絶対頭が下がらない私が、頭が下がるようにお育てをうけるのです。どんながんに親父でも朝晩お内仏の前に座って頭を下げて合掌礼拝する、このうしろ姿によって仏法が相続されていくのです。

家族の者がそれぞれ、つとめや学校に行き、そろって朝晩お内仏にお参りするということとはむづかしい時代になりましたが、お年寄りの仕事として、またはお嫁さんの仕事として毎朝お仏飯をお供えし、お線香をたき、合掌礼拝しましょう。お花もしおれないよう気をつけましょう。時間があつた時は舌々正信偈(節のないもの)をあげます。小さな子供さんがいる場合はひざの上のせていっしょに手を合わせおつとめをしましょう。それが仏法相続です。

(住職)

山門揭示板



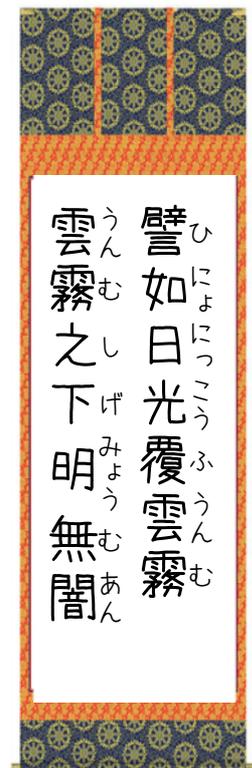
末法とは仏法が
廃れていく時代で
す。今日はまさしく
末法で、私たちはま
じめに仏法を求め
なくなりました。科
学技術の進歩発展
などにより、私たち
の生活は便利で豊
かになり人類は宇
宙に飛び出し、いの
ちも人工的に作り
出すようになって

のです。私たちは、自分自身のチエや能力を信頼し、
仏法など必要としなくなつたのです。しかしながら昨
年三月の東日本大震災による原発事故により人間のチ
エの愚かさと限界を思い知らされました。私たちはど
れだけ医学が進歩しても一人一人は生老病死する厳粛
なるいのちを生きています。一人として老病死をまぬ
がれることはできません。また幸せな人生のなかにも
ふと生きることの不安や虚しさ、淋しさを感じること
があります。清沢満之という先生は、

人心(じんしん)の至奥(しおう)より生ずる至盛(しじょう)
の要求の為に宗教あるなり

といわれています。私たちのいのちはうわべだけの幸
せではなく、もっと深い真実なるものに出遇いたいと
いう要求をもっているのです。(住職)

『正信偈』に先輩の感動あり



読み方

譬(たと)えば、日光(にっこう)の雲霧(うんむ)に覆(お)われるれども、
雲霧(うんむ)の下(した)、明(あき)らかにして闇(くら)きこと無(な)
きが如(ごと)し

意味

譬(たと)えば、太陽が雲に覆(お)われても雲の下は明
るいように、一度迷いの闇夜が明けたなら、
心が貪・愛・瞋・憎の雲霧に覆(お)われても、
真実は明々白白で疑いようがない。

疑いも縁 納得も縁

☆確かに、どんなに曇(曇)った日でも、地上が
真(ま)つ暗闇にはならないなあ…。宗教の救
いってそういうことなのかな？
★心が曇(曇)るとき、例(たと)えば体の調子が悪いと
きとか、人に馬鹿にされたときとかでも
救(すく)われるって、どうということやろう？

本山お差し向け布教がつとまりました



大阪 長田譲師

宗祖の御和讃

智慧の光明 はかりなし	有量の諸相 ことごとく	光暁かむらぬ ものはなし	眞実明に帰命せよ
----------------	----------------	-----------------	----------

下の写真のように、一般のご家庭のお座敷で御座（お説教）がつとまるのは、今では大変貴重なことです。

しかも、午後2座、夜2座、翌朝2座と、合計6座も聞法の場所が平かれます。

有ること自体が難しい、有り難いとは、まさにこのことです。

「近所のお座敷ですと、徒歩や自転車でお参りできませんから、仕事が終わった若い方もお見えでした。」

これもひとえに、先人方のお育てのたまものですし、ひいては仏さまの本願力のたまものです。

私たちのつとめは、先人方の声なき声を、ひいては仏さまのお呼び声を、ただ聞かせていただくことですね。（編者）



安田町 末定育雄氏宅にて



本堂町 八木哲雄氏宅にて

発行

真宗仏光寺派 専念山 さい うん じ 西雲寺

住職 護城一寿

筆頭総代 吉川芳弘

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町5-2

電話 0776-97-2138

メール kngojo@mx3.fctv.ne.jp

ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！
お寺から郵送いたします。どうぞ遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。